ネパール山村の開発と自然環境保全

――コテン村落の事例

飯島　正

ネパール山村―コテン村落

本稿の主題としているコテン村落は行政的にはバグマティ県カブレ郡アネコット村の第九号地区である。首都のカトマンズから東方に直線距離で三二㎞、自動車道路で七五㎞の地点にあり、標高一一〇〇―一三〇〇ｍに二一〇戸が散在し、人口は一三〇五人、農地のほとんどが階段状の畑と水田というネパールの山地地域のどこにでもある貧しい村落であった。

このコテン村落を含むマンダン地区を一九六四年に、「東京農業大学ネパール農業学術調査隊」（隊長　栗田匡一、島田輝男、島田淳子）が七ヵ月にわたって調査している。

調査に参加した島田輝男さん（元国際協力事業団派遣農業専門家）は、「私がコテン集落で目にしたものは、凄まじくも貧しい村の風景だった。雨期でも水不足で、生育の悪い水稲と陸稲、痩せたトウモロコシ、乾期には耕地が完全に干上がり、裸地となる。当時、山に自生するサルトリイバラや道端のイラクサの新芽が貴重な冬の野菜だった。冬になると男達は出稼ぎに行き、女達は国有林から薪を盗伐し、沙羅双樹の葉を採って町に運び、日銭を稼ぎ、塩と香辛料を買っていた。」と述べている。（島田輝男「現場から見た農村開発―ネパールの山村コテン集落の事例から」、地域開発研究所、二〇〇四年）

村落開発の推進者

この東京農業大学の調査隊にコテン出身のクリシナ・タマン青年が通訳（ヒンディ語）兼案内人として参加していた。

これを契機に、コテン村落開発の推進者のクリシナさんを支援する日本の人々、民間団体との関係を深めていくことになる。

翌一九六五年に島田輝男さんがインド平原に近いタライ地域に開設された東京農業大学ラプティ実験指導農場長に就任するとクリシナさんも農場現場監督として赴任する。一九七二年に、農業開発計画の農場として政府に移管されると、多くの種子類を背負ってコテンに帰郷し、農業に従事する。

また、当時、ネパールで医療活動中（日本キリスト教海外医療協力会派遣）の岩村昇医師が、著書『山の上にある病院』（新教出版社、一九六五年）で、ネパールからの農業研修者の日本での受け入れを訴えていた。

これに呼応するように、すでに古切手などを岩村さんのところに送っていた「国際ロータリー第二五四地区、青森、秋田」（以下「第二五四地区」と略称）では研修生を招くことを決定し人選を依頼していた。岩村さんはそれを島田輝男さんに依頼し、クリシナさんに決定した。

一九七四年八月に来日したクリシナさんは一年間、青森県の川要農場を中心に同農場長の菊池武彦さんから水稲、野菜、果樹、畜産などで多くの技術を伝授された。

クリシナさんは帰国後の活動資金として、「第二五四地区」から五〇万円を贈られた。

それを基金として村民とともに水路開発に着手することになった。

水路開発とモデル農場開設

八月に帰国して村民を説得し、諸手続を終了して十一月に着工、翌一九七六年六月に四㎞のかんがい水路を完成した。

水路はコテン村落と隣村との境界を流れるアシ川の標高一二五〇ｍの地点で取水し、一二〇〇ｍ前後のコテン村落にかんがいする。

幅六〇―一〇〇㎝、深さ三〇―六〇㎝の水路はコテン村落で使用されているネパール鍬のクダリ、万能鍬のようなクダロ、ネパール刀のク

クリなどの農具で、すべて人力で掘削した。この水路のかんがい面積は二〇ha、受益農家は一五〇戸となった。（その後、水路は二km延長された。）

水路の完成した年に、クリシナさんが農業研修をしていた川要農場に併設されていたユースホステルのカワヨグリーンロッジの管理者だった小川親子（チカコ）さんがクリシナ夫人としてコテン入りしている。

かんがい水路の開発はコテンの農業に大きな変化と発展の可能性をもたらすことになった。周年かんがいで周年労働が可能になり、多くの作物の導入が試みられるようになった。

しかし、多くの種子類を持って帰郷したけれども、それらをテストし、近隣、各地に普及するために利用できる土地を確保するゆとりは、大家族のクリシナ家では限られていた。

その事情を知ったネパール内外のクリシナさんの友人達のなかから、モデル農場の構想が具体化して計画書となった。

モデル農場は五年間で自立経営をする計画で、当初の土地購入費と農場施設建設費の調達が大きな課題となった。これも「第二五四地区」の支援をうけることになった。

一九七八年五月、国際ロータリーの東京大会の際、「第二五四地区」から大友利助ガバナーなど九名、ネパールから岩村昇さん、島田輝男、淳子さん夫妻が出席して、計画書が承認され、第一年次と第二年次に各一五〇万円、第三年次に七五万円の資金援助が決定した。これによって、一九七九年に農地三・七ha、三階建の農場施設をもった「タマン・モデル農場」が開設された。

クリシナさんは約三haの農地をすべて叔父、弟達に分配して家族だけで管理者としてモデル農場に入った。

翌一九八〇年に、川要農場長だった菊池武彦さんが「第二五四地区」からコンサルタントとして一年間モデル農場に派遣された。菊池さんは多くの種子を持参し、当時ネパールでは普及していなかった無加温簡易ビニールフレーム栽培、ビニールトンネル育苗、堆肥の発酵熱利用による発芽促進技術などを実験し、現地の人々に伝えた。

村落の開発と自然環境保全

モデル農場では、すべての種子、家畜などを実際に栽培、飼育をしたうえで、これまで種苗を無料で配布してきた。

コテンでは稲、小麦、トウモロコシなどの穀物で新品種が導入され、化学肥料の使用もあって、いずれの調査でも水路開発前に比較して倍増以上の収穫結果を示している。

野菜でも、乾期、雨期ともに栽培の種類が増加し、自給を達成し、さらに、市場向けの生産も増加してきた。モデル農場開設当時に栽培をはじめたタマネギ、ニンニク、トマトなどが一九九〇年代になると市場向けとなり、その種類も増加してきた。

畜産では、新たに改良乳水牛が導入され、これまで重要な食糧であったシコクビエ、トウモロコシを飼料としている農家もある。現在、コテンで三〇頭の改良乳水牛が飼育され、乳業開発組合（一九九六年設立）を通じて毎朝、乳業公社の集荷センターに出荷している。

今年三月、モデル農場でクリシナ夫人に、かつて初めてコテン入りした当時の食糧事情について質問をした。「弟達、叔父達の家族をふくめて二四名の大家族、通常はトウモロコシとヒエが主食であったが、腹八分目にもいかなくて、七分目か六分目程度であった。現在はどこの家族も腹一杯食べています。」、また、「その頃はサルトリイバラやイサクサも食べていた。おそらく九〇年代のはじめ頃まで」、ということであった。

食糧の自給が達成され、市場向けの生産が増加するにつれて、野草を食べる必要もなくなり、薪の盗伐も姿を消してきたのである。

こうして、そうでなくても希少な国有林や里山の林が保全される方向にむかっている。

さらに、コテンでは現在、燃料の確保、リサイクル、有機農業の試みとして厩肥利用によるメタンガス醗酵施設が建設されている。屋外にインド式水洗トイレと併設のメタンガス施設は一〇戸に新設されている。

このようにみてくると、コテン村落での水路掘削、農業での新技術、新品種などの導入による経済的な開発が、貧しさゆえの薪炭材などの伐採、盗伐などをなくして森林の減少を防止し、自然環境保全の大きな要因となることを実証した事例といえよう。

（いいじまただし・本学名誉教授）